

「うちやね 内屋根」をつくる

2019年10月～

つちのいえのカンヴァス布の屋根の一部が破れて穴が開き、室内に雨が入る。蟻引きしていたが、やはり布は長持ちせず、応急処置としてポリカ波板で雨漏りを防いでいた。

2019年度後期、対策を模索するうち、破れた布屋根の内側に竹で屋根を組み、雨水対策するとともに、ロフトとしても活用するというアイデアが生まれた。

こうした仕組みは先例がない。とりあえず「内屋根」と名付けて、制作に取り組んだ。

2018年後期～2019年前期は、教員らが総合基礎担当など諸事情のためにつちのいえは授業として行われなかった。そのせいか、2019年後期の学生参加者は4名（漆工2名、環境デザイン2名）と少なかったが、漆工の大矢一成先生がスタッフに加わった。



破れたカンヴァス布の屋根（2019年9月24日）。



穴の下にポリカ波板を入れて雨水を外に逃がす処置。

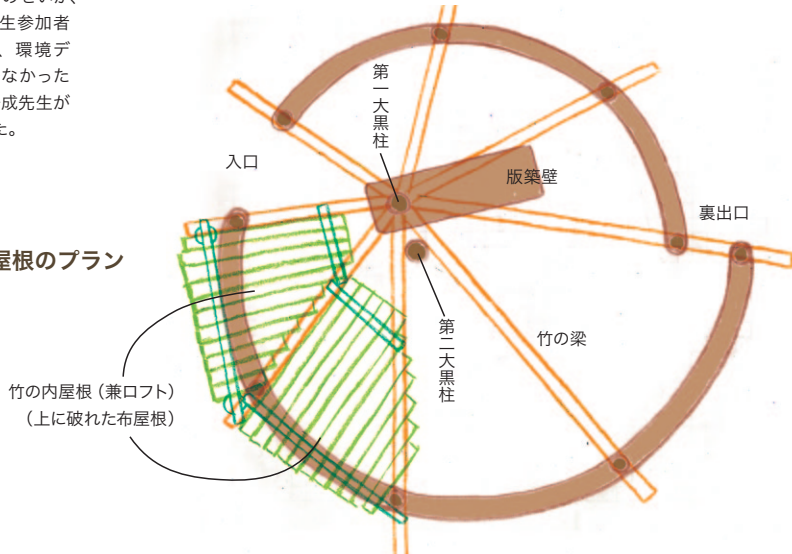


模型で雨水対策を検討する（2019年10月7日）。



屋根の下にもう一つの屋根（兼ロフト）をつくる案。

内屋根のプラン





大原野に竹を取りに行く。(2019/10/31)



竹を半割りにする。(2019/11/14)



半割りにした竹を並べ重ねて量のシミュレーション

竹の半割り方法

(約3m以下の場合) :

- (1) 竹割りナタで節1~2段分に割れ目を入れる。
- (2) 手でいっきに引き上げて割る。(全部ナタを入れる必要はない)
- (3) 木づちで中の節をとる。(きれいに仕上げる場合はノミで)



切った枝の長さ=柱の高さ。左はメジャー代りの丸太。



偶然にも2本とも高さがぴったり合う。(2019/11/14)

内屋根の竹材を受け止める梁を支えるために、倒れたシラカシの巨木の枝を切って柱にする。

自然の生木は、枝が二つに分かれる部分が梁の受けに使いやすい。生木の使い方がわかってくると、製材された材木を使うのとは異なる楽しみがある。(2019年11月14日)



梁はぴったり水平になった。竹を渡して角度をチェック。



つちのいえには生木の柱が似合う。

放射状に広がる竹の梁。円筒形の竹を角度をつけてはめ込むのはむずかしい。引回し鋸でカーブを切って嵌めてははずし、嵌めてははずし・・・を繰り返す。



既存の竹梁の間に、屋根竹を受ける竹を取り付ける。



半割りにした竹を上下合わせて載せてみる。



竹材の軒からの出具合を確認する。



半割りの竹を重ねるので、かなりの量が必要。



竹材は梁と方向をそろえて仮留めしていく。

竹材は、当初は方向をそろえる予定だったが、梁が当たって無理なことがわかり、梁の部分で交差するよう向きを変えることにした。(p.180図参照)



破れた布屋根の下の内屋根。



梁をはさんだ竹材の交差部。意外と美しい。

年が明けると4回生以上の参加はむずかしく、最後は実質二人(漆工専攻3回生の福永佑衣と石原彩華)の作業になった。



年明けの1月9日の作業。上端を針金でとめていく。



竹屋根に乗りながら竹材を固定する作業を続ける。



2020/1/23

2面の内屋根のうち、南側の面ができ、西側もあと少しのところ。



口トとしては天井が低く、傾いているが、居心地は悪くない。



完成した内屋根。梯子で上り下りする。これで雨漏りはしない。(2020/1/23)

ブルキナファソのアニメーション作家来訪 2020年1月26日(月)

ブルキナファソ出身のアニメーション作家クラベル・ヤメ オ ゴ Claver Yameogo さんが、パートナーの遠藤聡子さんとつちのいえを来訪されました。

遠藤さんは文化人類学者で、かつてブルキナファソ日本大使館に勤務されており、2012年秋に開催された「ワゴドゥグ国際工芸祭 SIAO」の日本館での井上の展示(p.118-121)のコーディネーターでした。クラベルさんは、アニメーションという間口の広い表現でアフリカの夢と現実を伝える活動に取り組んでいます。つちのいえにはお二人ともびっくり。記念写真を撮ると、「写真だけ見たらアフリカに帰ったと思われる」と笑われました。

